
パチュリー最強伝説

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パチュリー最強伝説

【Zコード】

N7139N

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

前書き

この話は「パチュリー」がもし健康になつて、身体能力もそれなりだつたら?」なんて発想から生まれました。まああらかじめ言いますけど、百合とかはありませんよ? 短編読み切りですけど、まあどうぞ。

(前書き)

シチュエーション設定
パチューリーが図書館でいつものよつたに読書をしていた時。時間は毎
ごろで天気は晴れ。

「」は紅魔館の図書館。

見張りと言つべきか趣味と言つべきか、いつものように本を山積みして、今日も黙々と読書をするパチュリー。

そんな時に、これまたいつものように魔理沙が簾に跨つてやつてきた。用は言つまでもない。

魔「おーっすパチュリー！…また本借りてくれ。」

そう言つて、パチュリーが返事もしていないにも関わらず、本棚にある本を次々と取り出した。

パ「ちょっと、まだ私は許可しないでしちゃう？」

自分の呼んでいた本を読むのをやめて、魔理沙を睨んだ。

魔「いいじゃねえか。あくまで借りるだけなんだから。」

と言つてゐる魔理沙の手元には、既に取り出した本が数冊あった。

パ「貴方の場合、返さないのが問題なのよ・・・」

ぶつぶつと魔理沙に言つたが、聞く耳を持たないとはまさにこの事である。

魔「大丈夫だつて、死んだら返すよ。」

パチュリーの心情など察する訳もなく、魔理沙は颯爽と飛び去つて

いつた。

パ「待ちなさい・・・」

立ち上がり追いかけようとしたが、もはやどう見ても手遅れであった。

パチュリーはまた椅子に座り、ため息を吐いた。

パ「はあ・・・本当に困った奴ね・・・でもひりやましいわね・・・あの元気は・・・」

さつきまで読みかけていた本をまた見始めた。

しかし、今のパチュリーはもうそんな気分ではなかった。

魔理沙のあからさまに元気な様子を見て、パチュリーは正直嫉妬していたのだ。

パ「私も・・・魔理沙ぐらい健康だつたらなあ・・・」

読んでいた本を閉じ、ぱーっと山積みになつた本に目をやると、その内の一つに思わず目が止まった。

その本は、明らかに他の本とは違う雰囲気をかもし出していた。パチュリーは、訳もなくそれに惹かれてしまつた。

パ「・・・あ・・・あれは・・・」

その本を取り出し、すぐさま読み始めた。

もちろん書いてある事は魔女にしかわからない。事にしてもらつた。

パ「・・・いける・・・」れさえあれば・・・私にも・・・」

何かに取り憑かれたように、パチュリーはひたすらにその本を読み続けた。

その頃、紅魔館のバルコニーで、レミリアと咲夜がたわいもない話をしていた。

レ「咲夜、現在の紅魔館の状態は？」

レミリアの問いに、咲夜は、

咲「は、以前妹様の暴れた後等はどうにか修復されました。この分でしたら数日には復旧されるかと思われます。」

それらしい紙を見ながら、レミリアに報告した。

レ「そう。まあ、うまく事が運んだりいいんだけど。」

レミリアの意味深な台詞に、咲夜が思わず尋ねた。

咲「また何かを感じ取ったのですか、おぜり・・・お嬢様。」

いい間違いそうになつたが、レミリアはそんな事など構いもせず答えた。

レ「そうね・・・まあ私のこれは、あくまで虫の知らせ程度だから、

曖昧なんだけどね。」

咲「また、外から面倒な者が来るかもしれない」と?」

レ「いや・・・これは外じゃないわね・・・」

そんな事を言つていると、突如轟音とともに紅魔館のドアが吹き飛び、庭に転がつていった。

咲「は!?まさか、また妹様が!?!?」

レ「違うわよ咲夜。これは・・・」

しばらくして、吹き飛んだドアから悠然と誰かが出てきた。それはあのパチュリー本人であった。

その様子に、咲夜が思わず驚いた。

咲「パチュリー様!?!なぜ図書館からお出でに・・・」

言葉を失つた咲夜に、レミリアは、

レ「・・・どうやら、もつ引きこもるのはやめたのね。パチュリー。」

」

全てを覺つたように言った。

パチュリーは庭を歩き、門から堂々と出よつとした。
そこに、珍しく起きていた美鈴が立ちふさがつた。

パ「・・・何のつもり?」

明らかに見下した目で美鈴を見た。

美「それはこっちの台詞ですよ。普段図書館から一歩も出ないパチュリー様が、いきなりドアを吹き飛ばして出てきて……一体どうしたのですか？パチュリー様はあまり外に出でてはよくないはずでは？」

その質問に、パチュリーは高笑いをして返した。

パ「そうね・・・そうよねえ・・・今までの私ならそんなイメージしかなかつた・・・でも今は違つわ！－私は生まれ変わったのよ！」

その様子に、美鈴は、

美「・・・魔理沙のせいで疲れているとは思つてましたが、ここまでとは・・・」

と呆れた様子を見せた。

その時、さつきドアがつ飛びされた玄関から、なぜかぼろぼろになつた小悪魔がふらふらと出てきた。

子「駄目です・・・美鈴さん・・・パチュリー様に挑んでは・・・今のパチュリー様は・・・」

何かを言いかけたようだが、力尽きたよつにぼたりと倒れてしまつた。

どうやらぼろぼろにしたのは、パチュリー本人のよつである。それを感じ取つた美鈴は、

美「・・・えーっと・・・パチュリー様？」

冷や汗がだらだらと出てきていた。

そんな美鈴に対して、パチュリーは両手を広げてどこかで見たことのあるような構えを取り出した。

パ「丁度いいわ。あの子じゃ物足りなかつたから、今度はあなたで試してあげるわ！！新しくなつた私の力を！！」

パチュリーから、今にも何かが放たれそうだ。

そんなパチュリーに、美鈴は、

美「・・・」うなつたら、多勢でかかります！！

と言つたが早いか、どこからともなく美鈴の部下っぽい者が現れた。美鈴と共に一斉にパチュリーに飛び掛つた瞬間、辺りがパチュリーの体から放たれた光に包まれた。

光が晴れると、そこにはぼろぼろになつて倒れた美鈴とその他の部下と、悠然と立ち尽くすパチュリーがいた。

パ「あら・・・貴方達でもこの程度？これじゃウォーミングアップにすらならないわね！！」

更に美鈴を見下した。

美「や・・・やつきの・・・まるで・・・」

美鈴達は、全員倒れたまま氣を失つた。

パ「いける・・・今の私なら・・・誰にも負けないわ！！はははは

ははーー！」

高笑いを上げ、そのまま紅魔館の門を開けて、パチュリーは外へと出て行った。
その様子に咲夜は、

咲「あれは・・・パチュリー様なのですか・・・あれではまるで・・・」

心配そうにレミリアに尋ねた。

レ「やうね。あのままじやどつなる事やひ。」

当のレミコトはのんきな調子である。

咲「レミコト様！？止めなくてよいのですかー！？」

多少声を荒げた。

しかし、レミリアはあくまで冷静である。

レ「駄目よ、今、パチュリーは変わらうとしているのだから。」

咲「変わらうとしている？変わったの間違いではないのですか？」

レ「違うわよ。変わらうとしているのよ・・・紛れもなくね。」

そう言しながら、まるで遠くでも見るような目で、パチュリーが向かつたと思える方を眺めた。

レ「パチュリー・・・あなたは、自分の運命に抗う事が出来るかし

「うわ・・・・」

見守る母のよつこ、レココアがぽそっと言った。

その頃、魔理沙は店にてさつきパチュリーからほとんじ泥棒まがいに借りていった本を読み漁っていた。

魔「なるほど〜、これはこうした方がいいわけか。」

じつくりと読み解いていたその時、店の玄関をノックする音がしてきた。

魔「お、こんな時に一体誰だ?」

玄関を開けると、そこには明らかに普段とは雰囲気の違うパチュリーが立っていた。

魔理沙自身はパチュリーの普段からの違いを感じ取れではないようである。

魔「何だ、パチュリーか。わざわざ来るだなんて、一体どうしたんだ?」

その辺りのおかしさを追求しようとすると、パチュリーは、

パ「用?用ならあるわよ・・・今まで借りた本を、今すぐ全部返し

なさい。」「

かなり怒った様子で、魔理沙に言った。

魔「ああ、その事か。悪いけど、ちょっと待つてくれないかな？今一度読んでる所なんだ。」「

仮にも事実を言つても、パチュリーは聞く耳を持つとしない。

パ「そつ言つて・・・一冊も返した事ないじゃない。」「

怒りはさらにつ強くなる。

魔理沙はそんな怒りをやはり感じ取れない。いや、恐らくはパチュリーがそんな怒るような者だと思つていなかからであつ。とりあえず魔理沙は言い訳を交えた一言を、パチュリーに言った。

魔「読み終えたらちゃんと返すって。」

その一言に、パチュリーの怒りは有頂天に達した。

パ「もういいわ・・・こいつなつたら実力行使よ！－！」

魔「ええ？それ、マジで言つて・・・」

と言いかける前に、魔理沙の店の玄関が派手に爆発した。
魔理沙はとっさに外に飛び出し、パチュリーから距離を取つていた。

魔「・・・どうやらマジみたいか、そんなに大事な本があつたのか？」

ぱつと戦闘態勢を整えた。

魔理沙もそろそろパチュリーのいつもと違う雰囲気を感じ取ったようである。

パ「そうでもないわよ。私はただ、本を返して欲しいだけよ。さあ、痛い目をみない内に、おとなしく本を返しなさい！！」

差し出せと言わんばかりに、魔理沙の方に手を出した。

魔「そうか・・・井、やるって言つならやるだけだ。手加減はなし
だぜ、パチュリー！！」

そう言つと空に飛び上がり、いきなり十八番のマスタースパークを構え出した。

魔「いくぜ！－恋符！－マスター・アスパーク！－！－！」

パチュリーに向かつて、豪快なマスタースパークが放たれた。
だが、パチュリーは周りに見えない壁でも張つているかのように、
魔理沙の放つたマスタースパークを遮つた。
その様子に、さすがの魔理沙も戸惑つた。

魔「何い？一体どうなつてんだ？何か小細工でもしたのか？」

放ち終えた後、パチュリーの方を見たが、これといって何かをした
気配はない。

ただ一つ妙な事があるとするとなるなら、パチュリーが不気味な笑顔を浮かべていた事ぐらいであった。

その様子に魔理沙が臆する事はなかつた。

魔「・・・しょうがない、こうなつたらパチュリーの苦手な・・・」

自慢の幕にまたがり、パチュリーに向かつて全速力で急降下した。

魔「接近戦で叩くのみ!!」

当然パチュリーは弾幕を放つて応戦した。

魔理沙はパチュリーの放つ弾幕をかいくぐり、パチュリーに対しても、今にも殴りかかるそうな距離まで近づけた。

魔「よし!! もらったあ!!」

幕をバットのようにして、パチュリーに振りかぶった。だがその攻撃は、見事に空を切つた。

魔「な!?」

振り回した勢いで態勢を大きく崩してしまった。

パチュリーは既に魔理沙の上空にいた。

パ「遅いわね!!」

魔理沙の後頭部に、両手で思いつきダブルハンマーを放つた。

魔「ぐう!!」

顔から地面に叩きつけられた。

魔理沙はどうにかして体勢を立て直し、即座にパチュリーから距離を取つた。

魔「……どうこう事だ……いくらなんでも道理が通らないぜ……
・病弱のパチュリーに、あんな事が出来る訳ないはず……」

だがパチュリーは、その言葉を遮るように答えてきた。

パ「そうね、今までの私ならこんな動き、出来る訳なかつたわ。でも・・・ある本が私を変えたのよ！…！」

魔「ある本？ある本ってなんだ？」

そう尋ねると、パチュリーは普段から手元に持つていてる本を魔理沙に見せた。

だが、その本は明らかに普段の本とは違つていた。

魔理沙はその本を見て思わず慄いた。

魔「そ・・・それは・・・」

驚きを隠せない魔理沙。

そんな魔理沙を尻目に、パチュリーが続けた。

パ「ふふ、この本が私を変えたのよ・・・そう、この秘伝の書が！」

表紙には、子供が書いたような文字で秘伝の書と書かれていた。

魔「まさか・・・パチュリーがそれを・・・」

パ「あら？あなたはこの本を知ってるの？」

魔「ああ・・・知ってるぜ・・・」

パ「そう、知つてゐなら話は早いわね。そつよ、これのお陰で、私は今健康体でいられるのよ！―まったく、この本に書いてある物は凄いわね！―喘息が治つてしまえば、私はあなた以上の身体能力を誇れる！―あなた以上の力を見せられるのよ！―」

高らかに話すパチュリーに、魔理沙は、

魔「・・・あのさ・・・パチュリー・・・言ひにくいくんだけど・・・」

申し訳にくそくな感じで言つた。

パチュリーはもちろんお構いなしである。

パ「何よ？降参の一言でも言ひ気？今更遅いわよ！―今の私は・・・」

魔「そうじやなくてさ・・・それ・・・私が書いたんだぜ。」

パ「・・・え？」

あまりの衝撃の一言に、さすがのパチュリーも言葉を失つた。

魔「いやー、どこにいつたのかな～なんて思つてたら、まさかパチュリーの所にあつただなんてな。」

他人事であるかのように話す。

パ「ちょっと！それってどういつ事！？」

魔理沙に思わず問い合わせた。

魔「それにさ、私の今までの魔法薬とかの調合を書いておいたんだぜ。今のパチュリーが使ってるのは、多分スーパー・ーつて奴じやないかな?」

パ「そ、ううよ……それよ……紛れもなくそれよ……」

魔理沙に思わず指差した。

魔「それ、確かに一時的に病気とか忘れちゃって、身体能力とかもも滅茶苦茶上がるんだけど……とんでもない副作用があるんだぜ・・・」

さつき以上に申し訳なさそうな様子で言つてきた。

パ「ふ、副作用? 何よそれ?」

動搖しまくるパチュリー。

魔「えーっと……ほら、無茶した分のつまづて事で……全身が・・・筋肉痛で・・・」

と言つたその瞬間、パチュリーの全身に電撃が走つた。筋肉痛の電撃が。

そう、全てはもう手遅れだつたのだ。

その日魔法の森に、かつてない悲鳴が響き渡つた。

しばらくして、魔理沙の家の布団で寝かされたパチュリーがいた。
そばには魔理沙が椅子に座つて看病をしていた。

魔「ははは・・・まさか、パチュリーがあの本に書いてある物を作つて、自分で使うなんて・・・思いもしなかつたぜ。」

あくまで他人事な調子だ。

パ「う・・・つむさい・・・何もかもあんたのせいよ・・・」

ふてくされるパチュリー。筋肉痛で体はまったく動きそうにない。
魔「でも、やつて使つたのは、パチュリー自身だろ？それは私の責
任じやないぜ。」

と正論っぽい感じの一言を言つた。

パ「・・・」

さすがに言葉を失つた。

そんな様子に、魔理沙が呆れた様子で尋ねた。

魔「にしても、なんでこんな事したんだ？普段のパチュリーからは
考えられないぜ。」

その問いに、パチュリーはか細い声で返した。

パ「・・・たかつた・・・」

あまりのものが細い声に、魔理沙が尋ね返した。

魔「は？ 何て言つたんだ？」

パ「私だつて・・・あなたみたいに・・・元氣に外で遊んでみたかつた・・・でも生まれつきの喘息と・・・この体のせいで・・・そんな事は望めなかつた・・・だから・・・一度でいいから・・・元気になりたかつた・・・」

パチュリーの田には、自然と涙が溜まつてきていた。
そんな様子に、魔理沙は少し冷たい様子で返した。

魔「・・・何だ、そんな事が。」

パ「そうよね・・・貴方にとつては他人事よね・・・」

魔「いや、そうでもないぜ。私だつて、昔はパチュリーみたいな引きこもりだった。お前と違つて健康なのにな。あの頃は・・・師匠といへりん以外は、誰も信用できなかつたんだ。」

暗い調子で語る。

パ「そんな頃が・・・あなたにあつたの？」

信じられない様子で、魔理沙に尋ねた。

魔「ああ、靈夢に会うまでは、私はずーっと一人で閉じこもつてたんだ。でも今はそんな事ないぜ。こうしてパチュリーとかアリストか同じ魔法使いに会えたし、色々な奴に会えた。だから私は、今

「うして、いられる事に感謝してる。」

笑顔で語るその顔を見て、パチュリーの心の中で、何ともいえないもどかしさが出来ていた。

そのもどかしさに、パチュリーにはなかつたものであらう。

パ「（そうね・・・そうよね・・・魔理沙だつて恵まれてた訳じやない・・・だけど魔理沙は私と違つて、こんなにも明るく・・・楽しそうにしてる・・・私はただ・・・自分に甘えてただけだつた・・・私は、魔理沙の事を何も知らなかつた・・・なのに私は、ただ健康な魔理沙に嫉妬して・・・）」

自分の中の情けなさを悔やんでいると、魔理沙がこんな事を言つてきた。

魔「パチュリー、実はな、あの薬にはあの本にも書かれてない欠点があるんだよ。でも、パチュリーはその欠点を見事に超えたんだ。」

パ「何よ・・・それつて？」

魔「まあ単純な事だよ。使つた本人に強い意志がなかつたら・・・あの薬は何の意味もなさないんだよ。だから、パチュリーにはパチュリーなりに強い意志があつたんだなつて思つたんだ。」

その一言が、パチュリーの中にあつたもどかしさを自然と消していつた。

パ「（そつか・・・私はもう・・・変わつてたんだ・・・体とかじやなくて・・・心が・・・でも私は、それに気づけてなかつた・・・本当に大事なのは・・・健康な体でもない・・・凄い力でもない・・・

・ IJの心なんだ・・・」

全てを覚ったパチュリーは、さつきまでとは明らかに違う涙を流した。

その様子に魔理沙は、

魔「ちよ、いきなりビリしたんだ！？まだ筋肉痛が残つてたのか！？」

と心配しながらも、見当違いの答えを出した。

そんな魔理沙を、逆に心配するかのように返した。

パ「大丈夫よ・・・もう答えは出たから。」

涙をぬぐい、魔理沙を見据えた。

魔「へ？ 答え？ 答えって、何の事だ？」

疑問に満ちた顔で尋ねた。

パ「ふふ・・・なんてこともないわよ・・・」

自然にはぐりかした。

魔「え〜？ だつたら教えてくれてもいいじゃねえか〜・・・」

いじける魔理沙に、パチュリーはあくまでオブラーートに隠した。

パ「今は・・・ね。」

そう言つて、そつと外の景色を見つめた。

これからもつと輝いて見えてくるであろう景色を、パチュリーはしつかりと見据えた。

数日後、パチュリーは紅魔館の図書館に戻り、いつもと変わらない日々を過ごしていた。

もちろん魔理沙はいつものように来る。だが、今回はいつもと少し変わっていた。

魔「パチュリー、悪いけど本借りてくれ。」

いつもの調子で言つてきたが、やはり何かが違う。

パ「別にいいわよ、でも、わかってるわね？」

承知しているのを前提としたような言い方に、魔理沙は、

魔「ああ、もちろんわかってるぜ。」

阿吽の呼吸で答えた。

二人は合図でもしたかのようにお互いの武器？を構え始めた。

魔・パ・いざ・・・弾幕勝負！――

そして二人は、図書館の開けた所で、文字通り弾幕戦を始めるので

あつた。

健康である事はいい事。強い事だつて、決して悪い事じゃない。
でも、本当に大事なのは、心の持ちようだと思つ。

私はそれを知つて変わつたのよ。皮肉にもそれを教えてくれたのは、
私に迷惑ばかりかける奴だけね。

BY 動かない大図書館 パチュリー・ノーレッジ

で続く

パチュリー 最強伝説 あなたの中

(後書き)

後書き

こんにちわみなさん。とうとう短編にまで手を出した瀧田です。ただし幻想入りではありますんけどね。

バクテリアに適当にあげた奴の中で、バクテリアが気に入ったのか知りませんけどやたら言つてきた（それほどでもなかつたかな？）ので、とりあえず手直ししてみました。

手直しする前はリアルやりたかっただけでしたので、どうにか投稿するのに相応しい感じにしました。

わしの話は、基本的にキャラに救いを作る的なノリが一番多いんです。これが一番典型的な奴ですね。

まあ個人的には記憶に忘れかけてたぐらいなんですけど、久々に掘つてみたら苦かったなあつてしまひじみ思いました。

でも話を書いた以上は、これでもしつかりと書き上げたつもりです。

では、この話があなたの心の中にはよつとでも残つていってくれれば、それだけで作者は満足です。

スペシャルサンクス

パチュリー・ノーレッジ 様

霧雨 魔理沙 様

レミリア・スカーレット 様

十六夜 咲夜 様

紅 美鈴 様

小悪魔 様

バクテリア 様

過去のわし

わしのインスピレーション

では、このような粗末な物を読んでいただき、真にありがとうございました。

P、S わしの書いた連載小説、三人一緒に幻想入りや導かれし者が幻想入りもよろしく。

BY 澄田 康美

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7139n/>

パチュリー最強伝説

2010年10月12日22時02分発行